

安全保障の出発点は

「不戦の誓い」にあり

逢坂 啓一 陸自68

安全保障とは究極的（理論的）には人類社会から戦争を根絶し、地球規模の恒久平和を保障しようとする国際的な政策であり活動です。しかし人類的な英知及び国際社会の成熟度の現状に照らすと、見通しうる将来における実現は不可能です。現実には、世界各国が追及している安全保障は世界の諸国を巻き込んで自国の安全を保障しようとする目指しています。自国の安全とは、自国が戦争に陥る「恐れ」から解放され

るといふ安全であり、それが、国民一人ひとりの安心に繋がっています。これが安全保障の現実的な目標であり、それを求めて止まない「努力」が安全保障です。安全保障が破綻してしまつた結果が戦争（武力行使）です。戦争そのものは安全保障の範疇外にあります。

本書3月号に「不戦を誓う勿れ」との論評が見受けられました。その趣旨は、「近年、日本人は全員『不戦』を誓い合う雰囲気になつてきているが、我が国は『不戦』を誓うのではなく『不戦』を実現するにはどうしたらよいか『熟慮』『断行』すべき」と述べています。しかし、安全保障の観点から考えると、まず世界の諸国が挙つて不戦を誓う（武力行使しないと表明する）という行為が、その出発点です。

安全保障という考えは、極めて近代のかつ政治的な産物であり、国際社会において広く論じられたのは、第1次世界大戦（以下、1次大戦）終了直後です。戦争は、その目的が何であれ、人の集団が、武力行使によつて、相互に、容赦なく殺傷、破壊、略奪及び支配を繰り返す行為ですが、歴史上、戦争がもたらす利益は極めて大きく、人類は戦争のたびに進歩し、その進歩が新たな戦争を生み、人類は、戦争によつて繁栄を重ねて来ました。ところが、

1次大戦になると、戦争が大規模化し、戦争による損害は、求めたはずの利益をはるかに上回り、勝者も敗者も、ともに衰退しかねない状態に至りました。

1919年、1次大戦の終結交渉のため、ベルサイユ講和会議に集つてきた列強の代表者たちの間には、二度とこのような悲惨な戦争は起こしたくない、という機運が高まりました。中でも、フランス代表のクレマンソーは、今後とも、このような大それた戦争を起す可能性のある国はドイツ一国だけであり、ドイツ再起の芽を徹底的に摘み取らなければならぬ、という強い信念から、席上、終始対独講和の強い硬路線を貫き通しました。その結果、ドイツに対してあまりにも過酷な講和条件を賦課してしまい、議決の後に強い自責の念に駆られました。仮に講和が成つたとしても、ドイツの塗炭の苦しさと怨恨はあまりにも深く、復興を成し遂げた暁には復讐の戦争に訴え、再び連合国、中でも隣国のフランスに対して、真つ先に襲いかかつてくるのではないか、という「恐れ」にとりつかれました。

クレマンソーは、「連合国としてそのような「恐れ」を払拭するために有効な方策を講じなければならぬ」という趣旨の問題提起を行いました。これに対し、アメリカ代表のウイル

ソンは、「すべての国が、永久に戦争はしないという『不戦の誓い』を立てると同時に、その誓いを確実に実行するための国際機関を常設すべきである。その上で、すべての国が、挙げて『脱武力』に徹して、国際社会における戦争が発生する『恐れ』を不断に予防し、発生しそうな場合には途上において制止し、やむなく生起した場合に「除去しよう」との趣旨を、確信をもつて提起しました。それは机上の空論ではないかという反論に対して、ウィルソンは、「もしドイツがフランスを攻撃すれば、世界中の主要な国が一斉にドイツに襲い掛かるという事実を、ドイツが事前知り抜いていたら、今次大戦に踏み切らなかつたであろう」という趣旨を述べて、安全保障を立ち上げる背景についても提起しました。これは、集団的な武力行使による「正義の戦争」を振りかざす「脅し」によつて「不正義の戦争」を排除しようという考えから出発しています。

このようにして、クレマンソーの疑念がもたらした問題提起と、ウィルソンの確信がもたらした対応策により、安全保障という考えの下絵が歴史の流れの中に描き出されました。

その結果、大方の理解と賛同が得られ、「不戦の誓い」を集約する国際法として国際連盟規約が制定され、それ

を履行するための国際機関として国際連盟が発足しました。これこそ、当時の人類の英知の結晶でありました。しかし、その後の国際紛争に際しては、大国の利害、武力行使に係る規定の欠如、議決は全会一致でなければならぬ等のため有効な行動決定が出来ず、会議は踊るばかりで実質的には進展しませんでした。当時における人類の英知であつたはずの国際連盟は、第2次世界大戦（以下、2次大戦）への突入を阻止出来ず、関係国の国土荒廃はさらに甚だしく、戦死者も1次大戦の5倍以上に上りました。

現在、人類の英知は、2次大戦の教訓を経て国連憲章を制定し国際連合を設立するに至つたが、この体制も多くの欠陥を内蔵しており、自国の安全保障を託するまでには至っておりません。我々は安全保障が破綻し、武力行使が発生した場合に備え、それを排除する有効な武力の準備を背景として、恒久平和を目指し、不断の脱武力の「努力」を積み重ねる必要が有ります。その出発点が、地球規模の「不戦の誓い」です。

【参考文献】

・日本文化による安全保障への道 和を以て貴しとなす 和貴の会